社會學の一元論的方針とモナド論的方針

（デュルケムの社會學方針に對する一考察）

淡　德　三　郎

序　言

社會學をして自律的な嚴密なる科學たらしめんとする努力、それはわがエミール・デュルケム及びその派の研究に一貫した特色であつた。而して此の特色を最も明瞭に示すものは、社會學の對象としての集團意識論並びにその研究方針であり、此の二點をよく理解する事はつまりデュルケムの社會學の根本思想を理解する事となるのである。

先づデュルケムは社會學の對象たる社會現象に他の何ものにも還元する事の出來ない特異なる實在を見た。これが卽ち集團意識である。それは個人意識の中に內在はしてゐるが、純粹なる個人意識に對して(一)外在的であり、(二)性質を異にする

と共に、(三)且つ(イ)時間空間に於ける(ロ)體統的地位に於ける、その優勝性は強制的支配力として個人意識の前に現れる。これが彼の集團意識論の結論であるが、然らば社會學は社會學のみが有する此の固有の對象に就いて、何を、又如何にして研究するのか。これが本論文に於て考察せんとする主題である。

一、デュルケムの社會學研究方針

社會學は個々の個人を取扱はずして社會を一の集團的實在として研究するといふ態度は、デュルケムに一貫した傾向であつたが、偖て然らば此の社會的實在に就いて社會學は何を研究しようとするかに關しては、彼の考へは必しも一定してゐなかつた。初期の思想に於ては、彼は社會現象の機能の研究を專ら重要視してゐた樣である。例へば一八八七年の『社會科學の諸研究』と題する論文に於て、彼は宗教國家經濟等に關するスペンサー、レグヤール、コスト、シェッフレ等の著書を論評し、『社會學は經濟的事實、國家、道德及び宗教等を社會有機體の諸機能として考察しなければならぬ』といつてゐる。("Les études de science sociale," Revue philosophique, vol., XXIV. P. 79) その後彼は次第に原因の探究をも重視し來り、一八九三年に出でた『社會分業論』の

第一篇は分業の機能の研究に、第二篇はその原因の探究に充てられてゐる。然るに一八九五年の『社會學的方法の規準』に於ては、機能よりも主として原因の探究が重要視されてゐる。而して彼の思想の特色も此の方面にあると思はれるから、次にその論述の大要を紹介する。

從來現象が滿足せしめる社會的必要を證明しさへすれば、必要な事はすべて言ひ盡されたと考へた學者が多いが、現象の目的を示す事と、如何にしてそれが生起し現在の如くあるかを說明する事とは全く別な事である。何となれば、その現象の目的は現象の特殊なる性質に基きこそすれ、現象の性質を決定する事を得ないからである。此の二部類の現象が互に獨立したものである事をよく證明するものは、現象が何の役にも立つ事なしに存在しうるといふ事である。即ち現象が實際上何らの目的にも適應せず、或は又嘗て有用であつたが今では唯惰性で存在を續けてゆくだけで、あらゆる效用を失つてしまつた場合がある。(例へば近親姦禁は明に社會事實であるが、それが如何なる機能を演じてゐるかは現在にあつては理解する事は出來ない。それは確かにそれのもつ機能の故に維持されてゐるのではない。)器官と機能とは獨立してゐるといふ命題、即ち器官は全く同一であり乍ら、しかも種々異れる目

的に應じうるといふ命題は、生物學に於て眞なるのみならず、社會學に於ても同樣に眞である。されば器官を作る原因はそれの役立つ目的とは獨立してゐると言ひ得らる。かくて我々は現象を生起する期成原因 cause effective とそれの滿たす機能とを別々に研究しなければならぬ。

なほ兩者は別々に研究さるべきのみならず、一般に原因の研究は機能のそれに先立つべきである。卽ち現象の原因を求め、然る後にその結果を規定するのが順序である。といふのは現象の機能は、一定の原因から生起せる該現象を維持する爲に役立ち、全然機能を失へる、若しくは有害なる影響を及ぼす樣な現象は、早晩消失すべき運命にあるが、それにしてもかゝる機能を意識して原因が生起したのでなく、原因はそれ自身の力で起り、それに應じて一定の機能が生じたのであるからである。(Les Règles de la méthode sociologique, 2e édition, 1901. PP. 110—20)

右の見地からデュルケムは社會學を定義してそは『制度、その發生並びにその機能的活動の科學なり La Science des institutions, de leur genèse et de leur forctionnement』(Règles, P. XXIII) としたのである。(但しこゝに制度といふは、個人意識の綜合によつて構成 instituer される一定の行動樣式及び一定の判斷にして、卽ちデュルケムの所謂集團意

識に相當するものである。されば普通の用語法に於けるよりは廣い意味に用ゐられてゐるので、寧ろ單に構成物と譯する方が穩當であるかもしれない。)

社會學は社會現象の原因並びにその機能を研究する學問であるとすれば、次に我々は此の原因や機能を何處に求むべきか、卽ち社會學的說明の原理如何。

之を決定するに當り、デュルケムが先づ排斥したのは彼の所謂心理學的說明である。これ彼の集團意識論の必然的結論であるが、こゝに述べんとする說明原理の消極的半面をなすものであるから、左にその論旨の大要を紹介する。

夫れ心理學的說明によると、社會には個人の外に何ものもないから、凡ての社會進化の起原はこゝに求められなければならぬ。隨つて社會學は心理學の最も一般的な系以上に何ものでもありえない。集團生活の最高說明は如何にしてそれが一般に人性から由來してくるかを示せば足りるのである。既にコントの方針はこれであつた。彼によると、社會事實は全く直接に人性より由來し來るものである。而して歷史の初期にあつては觀察によらずして直ちに人性より社會事實を演繹する事が出來る。尤も此の演繹的方法を進化の比較的進んだ時代に適用する事は不可能

であるが、然し此の不可能はコントにありては唯實際上の問題に過ぎない。それは出發點と到達點との距離が余り大となつて、案内なくして之に至らんとすれば道を迷ふ恐れがあるといふだけである。併し理論上に於ては人性の根本的法則と進歩の究極との關係はやはり分析的である。されば複雜なる社會現象も結局に於て個人心理に歸着する。(Règles, PP. 121—22)

スペンサーの考へも之に似てゐる。社會の形成は全く個人をしてその性質を實現せしめる爲であり、社會進化の變遷はすべて此の實現を一層容易に一層完全にする事を目的としてゐる。尤も彼も、一度び社會が成立すれば、それが個人に對して働きを及ぼす事を認めてゐるが、しかしその作用には別に特別の性質があるわけではない。例へば政治的目的はそれ自身に於ては何等價値のないもので、それは結局いはゞ個人的目的の總括的表現に過ぎない。それだから此の作用は結局いはゞ個人的活動が自分自身に働きかけるのと少しも變らない。(Règles, PP. 122—24)

勿論かくいふも個人の力を全然無視するのではない。しかし個人意識の存在といふ事は社會現象成立の必要條件に過ぎずして決してその決定的條件とはならない。それは唯社會生活を可能とするだけである。個人的諸性質は不定なる素材に

過ぎない。そしてそれは社會的因素,卽ち個人的意識の結合といふ事によつてのみ一定の形が與へられるのである。此の因素なくばそれは甚だ一般的な狀態,漠然たる隨つて可塑的(プラスティック)傾向として存するのみで,それ自身では社會現象を特質づけてゐる複雜な形をとる事は出來ない。(Règles, PP. 121—28, See also P. 130)『疑もなく社會には他の地盤はない(個人意識を除いては—譯者註)。しかしその個人が社會を形成してゐればこそ新現象が生起するのである。それは個人意識の上に働いてその大部分を形成する。此の故に社會は個人なくば成立しないが,しかしその各々は社會の形成者であるよりは,甚だ大いなる程度に於て社會の產物なのである。』("De la division du travail social," Étude sur l'organisation des sociétés supérieures, 2e édition, 1902, P. 342. foot-not.)かくてデュルケムによれば,結合は社會現象形成の單なる條件でなくして決定的な條件,言ひ換へれば能生的な力をもつ原因である。(註)

(註) 例へば社會的分業の原因を探るに當り,デュルケムは一般に自己保存本能とよばれてゐる傾向に甚だ重要なる職分を與へてゐる。しかしそれはそれ自身では分業を生む何の力もない。それが生存競爭を促す事によつて分業を發展せしめたのは,一に全く社會の結合樣式の變化の結果,從來の單に人々の同質を保たうとする集團意識が弱るとともに,又遺傳的影響が次第に不定なるものとなりし事に基く。("De la div du tra. Soc.," livre II, especially pp. 248—59, See also "Regles" PP. 14-15) 『かくて吾人は社會學的說明に於て,人間の欲望を考慮に入れる事を全く拒否せずして,しかも少しも目的論に陷る事はない。何となれば

その欲望は唯それ自身も變化するに於てのみ、社會進化に對して影響を與へうるのであつて、その變化といふのは全く目的論的性質をもたない原因に依つてのみ説明されうるからである。』（"Regles," PP. 15—16）

然し又次の樣に言ふ者もあらう、成程一度形成せられた後に於ては社會は社會現象の最も近い原因となるかもしれないが、しかしその始原に遡つて社會そのものが如何にして生起したかを考へれば、それは全く個人の心理的性質によるのであると。

しかしどんなに遠く遡つても結合の事實はすべての中で最も義務的である。如何なる場所、如何なる時代に於ても、社會は個々の個人に先立ちそのすべての傳統を個人の上に課してゐる。その壓迫は例へば大氣の樣に意識されない事はあるとしても常に存在してゐる。全く社會を離れた純粹個人といふものは到底考へられない。（"Regles," PP. 128—29）（註）

（註）以上の論述によつて知られる如く、デユルケムは心理學的方針なる名稱の下に、狹い意味の心理學的方針、即ち主知的個人主義的方針と、タールドより始つた所謂心理學派の方針とを區別してゐない。否屢々後者をも前者と同樣に取扱つてゐる形跡がある。しかし『自殺論』に於てデユルケムがタールドの模倣説に對して與へた批評は、兩者の思想の對立を知る上に於て甚だ興味があるから左にその論旨を掲げる。（"Le Suicide," 2e édition, 1911, PP. 108—13）

今タールドは模倣を以て一切の社會現象を説明する根本原理と見做すのであるが、然し彼が模倣といふものの中には區別されねばならない三部類の事實が同時に意味されてゐる。その三部類の事實とは

(一)同一の意識狀態を多くの主體が同時に抱く時、それらの主體が互に結合して一の新狀態を生ぜしめるといふ事實。(二)流行模倣又は慣習模倣。(三)暗示模倣。

此の中の第一の意味に於ける模倣は決してタールドの言ふ如く、單に夢遊病的な暗示模倣に歸する事は出來ない。これは集合せる一定數の人々が、同一の事情によつて同樣に影響せられた結果、彼等が個々の感情の外部的表現の同一なる事によつて、少くとも部分的な此の一致を認知する事に基いて起るのである。(卽ちギッディングスの所謂同一刺戟に應ずる同一反應の原理を、こゝでデュルケムは認めてゐる。)卽ち互に此の一致を認知すると、認知せられた周圍の人の感情なり表象なりが吾人の意識の中に於て次第に結合して、こゝに一の新しき意識狀態が現れてくる。實際そこには模範もなければ模倣もない。團體の內部に於て一定數の狀態の透入と融合とがあるばかりである。かくの如きは決して模倣といふ名で呼ばるべき現象ではない。しかもそれは正しく『共同感情の共同的れり上げ』であるといふ意味で社會現象である。

次に第二の流行模倣又は慣習模倣に就いて考へて見るに、これは確に前者と異つて反復といふ要素を含むでゐる。けれども此の反復は決して所謂模倣といふが如きものに基くのでなく、一方に於ては我々の同胞の感情を傷けまいとする一種の協感的氣持 Sympathie から、他方に於ては流行とか慣習とかいふ集團的活動又は思考の樣式に對して我々の感じる尊敬と、集團が此の尊敬心を維持せしめんとして我々に及ぼす直接乃至間接の壓迫から起るのである。

第一の部類の事實は或る意識狀態が共同に感じられるといふ事によつて成立し、第二の部類の事實は輿論の權威の前に服從する事によつて成立するので、何れも單なる暗示模倣とは種類を異にしてゐる。前二者は何れも結合又は團體なる因素に基いて起つてゐるに對し、唯これのみが純心理的である、タールドはかくの如く性質を異にせる現象をすべて同一なる模倣といふ名稱の下に包含し、之を社會現象の本質と見、又說明原理としてゐるが、嚴密に考察すれば、右の如く純粹なる模倣は甚だ狹い範圍に限局されるのである。而してかく制限されたる意味に於ける模倣に、社會現象を說明する樣な力のない事は言ふ迄もない。

以上我々はデュルケムの社會學的說明原理の消極的方面を見た。然らば積極的

に社會學は如何なる說明原理に隨ふか。先づ彼は社會事實の原因探究の原理を次の如く言ひ表してゐる。

(一)社會事實の決定原因は先行する社會事實の中に求めらるべし。("Règles," P. 135)

こゝに先行する社會事實とは何を意味するか。今彼が『すべて社會的なるものは表象よりなる。隨つてそれは表象の產物である。但し社會學の問題である集團表象の成生は或る根本觀念の進步的實現ではない。……新狀態が生れるのは大部分古い狀態の集まり結合する爲である。』("La prohibition de l'inceste et ses origines," L'Année Sociologique, vol. I, 1898, P. 69) といひ、或は又一度び生れた集團的感情や觀念は『互に牽引し排斥し結合し分離し又增大する。しかもこれらの組合せは基礎たる實在の條件によつて規定される事なく、促される事はない。』("Les formes élémentaire de la vie religieuse," 1912, P. 604) といふのを見ると、彼は集團表象自身に自働的な集合離散の能力があると考へてゐた樣に思はれる。然るに他方又彼は次の樣に言つてゐる。『新狀態は又社會的地盤の中に起る變化に基く事もある。例へば領土の擴張とか、人口の容積密度の增大等』("Le prohibition de l'inceste," P. 69) かくて彼が先行する社會事實といふのは、先行する集團表象といふ意義に解せらるべきか、それとも又先行する結

合樣式の謂であるかが、こゝに決せらるべき問題となる。

今彼の所謂內的社會環境なる mileu social interne 概念は、此の問題に對する彼の眞意を表すものと思はれる。卽ち彼は前揭の規準の補充として曰く『すべて重要なる社會過程の第一の起原は內的社會環境の構造の中に求めらるべし。』（"Règles," P. 138）

社會生活の現實の諸事件は社會の現在の狀態より由來せずして、過去の事件、卽ち歷史的先行事實より由來する。而して社會學的說明は一に現在を過去に關係せしめる事にある。（"Règles," P. 143）所で社會の過去の事件といふのは、デュルケムによれば、それは內的社會環境に外ならぬ。こゝに內的社會環境とは物と人との二要素から成立してゐる。物とは社會に合體せられた物質的事物の外に、先行する社會活動の產物、例へば法律とか風習とか文藝美術の作品等を含む。（"Règles," P. 138）之は明かに先行する集團表象に外ならない。卽ち我々はデュルケムの所謂內的社會環境を構成する一要素として、先づ集團表象の一群を數へる事が出來る。然るに彼によれば此の要素だけでは社會的變遷を決定すべき何の力もない。實際それは一定の重味で社會進化に影響を與へるが、しかもそれはそれ自身社會進化の進行を促す原動力ではない。それは『社會の生きた力の向けらるべき材料』（"Règles," P. 139）に

過ぎないのである。つまり新しい集團表象は古い集團表象によつてその性質や形成の速度を決定されるとしても、後者それ自身には前者を生む力はないのである。そこに『社會の生きた力(Les forces vives de la société)』が働いて始めて集團表象變遷の過程が可能とせられる。然らば『社會の生きた力』とは何であるか。それは卽ち內的社會環境の第二の構成要素たる人である。此の人的環境こそ社會現象の進行の眞の原因たる事が出來る。

その中最も重要なるものは(一)社會的單位の數、卽ち社會の容積、(二)人口集中の程度、卽ちデュルケムの所謂動的若しくは精神的密度 La densité morale on dynamique である。こゝに動的密度とは一定の容積に於て單なる經濟的關係のみならず、更に精神的關係を結んでゐる、詳しく言へば啻に奉仕を交換し競爭をなすばかりでなく、更に共同的生活 La vie commune を營んでゐる人々の數によつて決定される。(Règles," P. 139) 而して此の動的密度を最もよく表現するものは社會的環節 Segment 合一の程度である。(註) 社會的環節が互に獨立してゐる間は、一般にその成員の活動はその環節內に限局される。然るにこれらの部分社會が全體社會の中に融合されるにつれて、社會生活の範圍は擴大する。(" Règles," P. 140)

（註）社會的環節合一の程度によつて、デュルケムは社會に二つの類型を見た。一は彼がオルド hordeとよぶ所のものにして、その結合が全く類似より來る、絶對に同質的な社會である。彼は之を以て『すべての社會類型の發足する萌芽、眞の社會的原形質である』と呼んでゐる。（"De la div.du tra. Soc," P. 149）これを基礎として其のいくつかの反復によつて成立する社會が所謂環節社會 Société Segmentaire にして、それはその性質上オルド類型に屬する。之に反して第二の類型に屬する社會に於ては、諸環節は融合し、夫々特殊なる機能をもち、それ自身又分化した部分からなる諸器官の全體（システム）によつて構成されてゐる。（"De la div. du tra. Soc," P. 157 et Suiv.）而してデュルケムによれば産業、政治、科學、藝術等は社會の種類（エスペス）を定める標準とならずして、唯その歴史的段階を定めるだけである。それは社會の表面的現象に過ぎずして社會の眞實の個性を表すものではない。かくて『日本は我々よりその藝術、産業、政治的體制を借りる事は出來る。しかし日本はやはり佛蘭西や獨逸とは異つた社會類型に屬してゐるのである。』（"Règles" P. 109. foot-note）

此の動的密度と單なる物質的密度とを區別する必要がある。物質的密度とは一定の地域に於ける住民の數や交通通信機關の發達の狀態をさす。一般には此の二種の密度は並行し、後者は前者の尺度となる。（"Div. du tra. Soc," P. 238）しかし此の關係は絶對ではない。勿論動的密度が發達すれば必然的に物質的密度も發展するが、しかし物質的密度の發達は必しも動的密度の發達を伴はぬ。往々にして道路や電線の發達が經濟的亦通關係のみを發達させて人口の融合には余りに役立たない事がある。例へば英國の如きはその例である。（"Règles" PP. 140—41）これ前者が第二次的な、社會の表面上の現象に外ならない事を示すものであつて、例へば悟性は意識

の最上層の、最も表面的現象に外ならない爲、敎育等の外的影響によつて容易に變せしめられるが、しかし精神生活の基礎は毫も變動を蒙らないが如くである。(“Div. du tra. Soc.,” P. 266 foot-note 4°) されば根本的なものはいふ迄もなく動的密度であつて、これがすべての社會事實を決定する基本的原理となる。

但しかくいふも此の動的密度そのものも亦、他の原因より由來するものなる事を否定するのではない。それは又それ自身、或はその社會に內在的な、或はその社會と他の社會との相互關係に基く社會的原因に依存してゐる。けれども科學といふものは言葉の絕對的な意味に於て第一原因を知らうとするものではない。科學にとつては或る事實は多くの他の事實を說明するに足るだけに一般的である場合にのみ基本的事實となる。所で動的密度の變化はその原因が何であらうとも、社會有機體のすべての方向に反射してその機能に大なり小なり影響を與へる事が出來るのである。(“Regles,” PP. 141—142) かくて『吾人は社會界の此の引力の法則を立てるだけで滿足しそれ以上に遡らない。』(“Div. qu tra. Soc.,” P. 330. foot-note)

今や社會事實の原因は確立せられた。卽ち社會事實の原因を說明せんとすれば、我々は先づ一方に於て先行する集團表象を明かにすると共に、他方に於てその變遷

を現實的ならしめた原動力として動的密度を明かにしなければならぬ。而して一切の社會現象は一定の原因より機械的必然性を以て生起する。文明は人間が之を理想とするが故に進歩するのではない。それは一定の狀態の必然的結果に過ぎない。言ひかへればそれが人間に齎す利益の故に文明が進歩するのではない、發展せざるを得ざるが故に發展するのである。("Div. du tra. Soc.," PP. 327—28)

次にデュルケムは社會事實の機能を說明する原理を次の如くに述べてゐる。

(二)社會事實の機能は常にそれが何らかの社會的目的に對してもつ關係の中に探らるべし。("Règles," P. 135)

そこで問題となるのは抑々社會的目的とは如何なるものであるか、それは何によつて決定されるか。之を個人的目的に關係させる考への誤れる事は先に說いた。デュルケムは之をも亦內的社會環境に關係して說明しようとする。夫々の社會環境に應じて、特異なる社會的目的若しくは社會的必要が生じる。然るに他方社會事實なるものも亦此の環境に基いて起る。此の際それは全く機械的に生起するのであるけれども、しかも一旦生起した以上、それは唯その生起せる社會の必要に應じた

機能をもつ事によつてのみ永續しうるのである。これデュルケムが社會事實の機能を一定の社會的目的に關聯して考察しようとする所以である。（"Règles" P. 146. See also "Div. du tra. Soc.," P. 338）

以上私はデュケムの研究方針の要旨を述べ來つたが、次號に於て少しくその意味を考察し、以て此の稿を終りたいと思ふ。